

第六話 自治省行政課長時代

自治省行政課長に

行政課長の仕事

第一次臨調

土地利用計画を研究

―自治省行政課長に

「千葉県は友納体制になり、先生は自治省にお戻りになって、行政課長になられましたね。これは、いよいよ自分のやりたい仕事になったという感じでしたか。

宮澤 戻った時には、千葉県の人から、「宮澤さん、千葉県の副知事をやられたのには、自治省では課長ですか」と言われてしまいました。「いやいや、行政課長は偉い課長なのです」と言いましたけれども。

心中では、副知事から行政課長では、まんざら悪いことではないと思っていました。日本の行政における内政機関のあり方などについて、私も多少考えるところがあったものですが、課長と地位が下がったようには見えませんが、行政の仕組みを勉強しておくのは自分のためにもなるし、日本の行政のあり方に少しでも貢献できるかもしれないと思いました。ずうずうしかったのかもしれないませんが、私自身はそうに考えていました。

行政課長についてなぜ私がそのように考えていたかを申し上げてみたいと思います。今さらいうまでもなく、日本の明治以来の行政は逐次、制度・組織が整えられてまいりました。私は、戦前日本の行政の中心は、何といっても内務省だと思っていました。それは単に、内務省の連中だけが思っていたわけではありません。

その当時内務省は四十いくつかの県を支配していて、地方自治に関する法制である府県制度と市町村制度を握っているということがあったからだと思います。そういう意味合いから、内務省の中でも特に地方局が偉いということになっていたのです。

内務省の傘下には、土木局もありましたし、警保局もありましたし、ひと通りのセットは揃っていました。しかし、やはり内務省といえれば地方局でありまして、知事を通じて府

県なり市町村をコントロールしている。良い悪いは別にして、そういうことであつたからだと私は思います。そもそも入省のスタートからそういうことでしたから。

しかし、戦争になつて、日本は負けに負けました。その後がまことに悲惨なものでした。GHQがやってまいりまして、各省が今まで所管してきた仕事を、民主主義の立場から、民主主義に反しない限り続行していこうということになりました。各省が皆そうです。各省が皆GHQの相手者と適当にいい仲になつて、行政を進めていったわけです。

ところが内務省は、昭和二三年でしたか、解体してしまえということになりました。これは警察、特に特高がいたからでしょう。ですから、鈴木俊一さんがよく言われるように、「十何人かで日本の行政に関与することになつた」ということでした。そういう時代ですから、いずれ日本の内政とは、もつときちんとした形で生き返らなければいけない。そのためには、行政課長というのは、単に一課長ではあるけれど、昔の内務省地方局の行政課の仕事をやるといふことだから、大層意義があるし、自分の勉強にもなると思つたのです。そういうことで自治省に帰つたのですが、ここには十何人しか職員がいなくて、酒を飲むにも、酒屋から一升瓶を買つてきて、役所の部屋で一杯やるというのが大宴会でした。

せんでした。ところが、その青木さんという人は、大変丁寧でおとなしい人である。また、島根の選挙地盤もびったり押さえ切っていて、しかも竹下さんの子分ということで、選挙は全く心配はなしということです。人柄もちゃんとしておりました。私は、惚れ込んだというところ少しおかしいけれど、同期にああいう人がいるのか、と思いましたね。

— 参議院二期目 — 兄宮澤喜一、首相となる

— 海部総理は、結局法案はできないということで平成三年の秋に政権を投げ出す形になったわけです。後継には経世会の面接を経て宮澤喜一さんがなられましたね。

宮澤 そうですね、面接というのがありましたね。これは不評でした。ただ、政治家になつたのだから、一度は総理を本人もやりたかろうし、親族としても一度ぐらいやらせたという気持ちは持っていましたから、結構な話だという程度でした。

— 総理大臣になるということになる、兄弟としても当然応援されるということでしょうか。

宮澤 私はあまりそういう言葉は好きではないのですが、世の中で「宮澤三兄弟」とか

いわれます。何が三兄弟かといいますと、三人とも東京大学を出て、高等文官試験に通って、それから高級公務員という仕事に就いたということでしょうね。しかし、東京大学を出て高文を通るなどというのはむずかしい話ではないのです。けれども、「宮澤三兄弟」というように、結構話題にされました。「あなた方兄弟三人については、親はどういう教育をしたのですか」ということをよく聞かれるのです。私は普通の教育を受けたもので、何も特別な教育を受けたものではありません。

また、「親が三人を別々のところに配置したのではないか」とよくいわれます。しかし、それは全く荒唐無稽な話でして、宮澤喜一は大学を出て、大蔵省というのがかねてからの希望だったでしょう。私は大蔵省に行くわけにはいきませんし、行くつもりありません。そうすると、広く行政の勉強ができる内務省に行くことになりました。弟は前から外務省に行きたがっていましたから、親が意図してそういう仕組みを作ったわけではないのです。

「予算の時などには相談するのか」などとも聞かれますが、「そんなばかなことをするわけがない」ということです。大蔵大臣が、私のところに電話をかけてきて、「ああしろ、こうしろ」などということがありません。しかし、世俗の言い方からすれば仲

の良い三人でしょうね。

「やはり仲良くしていて、よく三人でお会いになることはあるんですね。」

宮澤 時々ご飯などを食べます。その程度です。よく世間の人から、「宮澤喜一というのはどういう人ですか」と聞かれますが、これまたむずかしいのです。私達は兄弟で、比較的近くに住んでいます。が、「どういう人ですか」と聞かれても、「一言でいえば、政治家でありながら権力から遠くありたい、あるいは権力者との付き合いがあまり濃くなることは好むところではない。要するに権力というものに対して非常に神経質だと、兄を傍で見ているとそう思います」ということにしているのです。

兄もまた、叙勲を受けておりません。兄がなぜ勲章をもらわないか、ということ、私は一度も聞いたことがありません。勲章から遠ざかっているということではないでしょうか。恐らく宮澤喜一も、権力に近接することを避けるという気持ちが奥底にあるのではないかと思います。

「兄弟として、お兄様のために特別の協力をするということはありませんか。」

宮澤 「あまり」ではなく、全くしておりません。ただ、選挙運動だけは別です。こと